

「そのあわれみはとこしえまで」

～庭師の視点で人類を見る～

「神がどれだけ大目に見て、こらえてくれているのかが、わからないのか？それとも、そんなことはお構いなしか？神があなたにバツを与えずに待っていてくれたのは、過ちから足を洗い、更生の猶予を与えるためだというのが分からないのか？」

ローマ人への手紙2章4節 [アライブ訳]

天皇陛下ご夫妻が軽井沢に静養にいられました。任期中最後の軽井沢となり、大勢の方々が出迎えにいられたそうです。お二人の出会いの場ともなった、思い出のテニスコートにも足をお運びになりました。

陛下は戦争の直接的な責任を負っておられたわけではありませんが、平和のための努力は最後の最後まで全力でなさっておられました。平和の時代の「平成」の時代を背負われた陛下の使命であるご自覚なさっておられたのでしょう。日本国憲法に表現されている「象徴」としての天皇の役割に悩みながらも、取り組まれて来られました。

次の時代はどのようにになっていくのか？なっていくべきなのか？さらに難しい時代になることは予測しがたいことではないように感じています。物質的、経済的な問題というよりも、“心の拠り所”という問題が最も大きな問題になってくるように思います。そのような真実を追求したくなるような時代になればなるほど、真実に対して胡麻化して生きて行こうとする心も強くなっていくことでしょう。闇はさらに深く、複雑になっていき、混乱する時代となるでしょう。しかし、そんな中にあっても、素直に正直になり、真理に心を開く人々も多くなることと思います。そんな中で、教会は益々、神のことばである聖書の真理を光として語り続ける必要があります。もちろん言葉ばかりではなく、生き方も通して…。

以前に聞いたメッセージの例話の中で、「庭師の目」という例話があります。一流の庭師は、自分が作った庭を一望できる場所を造っているということです。自分が伝えたいメッセージがそこに立つと見えてくるという場所だ。この世界は不可解な事ばかりでただ不安になるばかりだが、一つの「信仰の目」「神様の視点」から見るとこの世界のすべてが意味があるということに気づく。また、私たち自身の人生で起こるすべての出来事が一つの神様の憐れみ深いメッセージとして届けられていることに気づくようになる。

私たちが立つべき場所は神の御言葉である聖書の上。我が家の土台の下には聖書が埋められています。それは象徴的で、私たちの家庭がいつも神様の言葉の上に導かれるようにという信仰に立っているわけです。あなたの人生の土台は何ですか？軸足がしっかりと固定されていないと、どんな夫婦も、家庭も、結婚も、仕事も、子育ても、老後も、すべてが不安定になってしまいます。キリストを基として進まれることをお勧めいたします！